

創立50周年までの10年間を振り返って

上智大学短期大学部学長 山 本 浩

2023年に上智大学短期大学部は創立50周年という記念すべき年を迎えました。10年前の上智大学創立100周年、短期大学部創立40周年、上智社会福祉専門学校創立50周年の際には東京・有楽町の東京フォーラムにおいて、天皇、皇后両陛下のご臨席のもと、3校合同の記念式典が開催されました。あれから10年がたち、短期大学部創立50周年を祝うことができ喜んでおります。

1973年4月に「上智短期大学」として開学した本学は、2012年4月に「上智大学短期大学部」と名称変更いたしました。私は、名称変更の翌年から学長を務めておりますので、ここでは、これまでの10年間の短期大学部の歩みについて書いていきたいと思っております。

2014年度に学校法人・上智学院は10年間の中・長期計画である「グランド・レイアウト2.0」をスタートさせました。そして2019年度には「グランド・レイアウト2.0」の前半を終えたところで、後半の新たな計画として「グランド・レイアウト2.1」を設定し、これを2022年度まで運用しました。短期大学部は、この「グランド・レイアウト2.0および2.1」に掲げられた目標を達成すべく、様々な改革を行ってきました。

「グランド・レイアウト」の目標の第1には、短期大学部の組織・教育体制の基盤となる入学定員の充足ということが掲げられていました。短期大学部では、この目標達成のために高校生対象のオープンキャンパスや授業見学会を開催し、データ分析に基づく効果的な大学広報を行ない、教職員は全国の指定校を訪問し、また、教員による高大連携の出前授業を実施しました。2020年にコロナ禍が広がるようになってからは、動画配信を充実させ、オンラインでの個人面談を実施するなど工夫を重ねました。その結果、コロナ禍が始まるまでは、入学定員の充足という目標は順調に達成できていました。ところがコロナ禍が広がるようになってからは、18歳人口の減少、四年制大学への進学率の上昇、女子の共学志向の高まりなど様々な原因が重なり、本学への志願者が急激に減少するという事態に直面しました。そのため、すでにご存じのように、2025年度以降の学生募集の停止という決断を下さざるをえませんでした。在学生、ご父母・保証人、卒業生、そして秦野市を始めとする地域の皆さまに寂しい思いをさせてしまったことを深くお詫び申し上げます。

「グランド・レイアウト」の第2の目標は、短期大学部と上智大学との連携を強化することで、同一の学校法人下における施策の共有と標準化を行ってきました。上智大学との連携

の一つとして、短期大学部学生の上智大学への特別編入学制度がありますが、2017年度からは、学長推薦による上智大学への編入学を特別編入学 A 方式と呼び、上智大学の一般編入学試験受験による編入学を特別編入学試験 B 方式と呼ぶように制度を整備し、分かりやすくしました。このうち A 方式については推薦枠が徐々に拡大しており、現在、学長推薦は 22 名までできるようになっています。

特別編入学以外にも、短期大学部では上智大学との連携を強めてきました。2014 年度からは、上智大学の教学支援システムである「Loyola」を短期大学部学生も使用できるようにしました。また、授業の課題を提出したり小テストを行ったりするための e-learning のプラットフォームである「Moodle」も、短期大学部の教員・学生が使用できるようになりました。こうしたシステムの導入は、学生の情報リテラシーの向上のために欠かせないだけでなく、上智学院全体の一体感の醸成や、上智学院の設置する学校間の業務の標準化に貢献しています。

第 3 の目標は、教育の内部質保証を推進することです。短期大学部の卒業認定・学位授与の方針には、学生たちがキリスト教ヒューマンイズムの理念のもと、人間の尊厳を深く理解し、他者との共存を実現できるようになること、そして、教養力・英語力・専門力・多文化共生力を十分に身につけることが掲げられていますが、短期大学部では、それらを実現するための教育プログラムの改善を図ってきました。たとえば英語力の養成に関しては、2007 年からコンテンツ・ベースで英語発信力を鍛えるための英語必修科目「英語 I ～ IV」をレベル別クラス編成で開講していますが、2013 年度にはこれに加えて、英語必修科目に「TOEIC 対策講座」を導入しました。また 2017 年度には英語スキルズ科目に準上級クラスを新設し、基礎・標準・準上級・上級の 4 レベルに細分化しました。さらに、TOEIC に特化した自習用の e-learning プログラムを導入した他、2015 年度には英語補習クラス「英語ファンダメンタルズ」を開講し、学生全体の英語力の底上げをはかりました。

必修科目の「人間学 I」の授業では、学生たちの教養力測定のために、この授業で提出された課題の小論文のアセスメントを行いました。その結果、課題図書を読み方、参考文献の利用の仕方、議論の進め方、小論文の書式などに改善の余地があることが判明し、「人間学 I」の授業と「基礎ゼミナール」の授業を通して、学生たちのアカデミックスキルの向上を図っています。

専門力養成の中心的な科目である「ゼミナール」では、2016 年度より、ゼミ論文の作成を必修化しました。これによって、学生は学びの集大成として、それまで学んできたアカデミックスキルを使って、各自が選んだテーマについて考察を深めたゼミ論文を作成しています。学生たちは、問題を発見し、その問題について自分で調べ考えていく能力を高めることが求められていますが、そのためにはゼミ論文の作成が大変有効だと考えています。

第 4 の目標は多文化共生の推進を図ることです。この目標のためには、サービスマン活動が大いに貢献してきました。教室で勉強したことを地域でのボランティア活動で実

践するサービスマーケティング活動は、短期大学部がとくに力を入れているもので、多くの学生がこれに参加してきましたが、2019 年度には、秦野市の小学校での外国籍児童の日本語、教科支援を行うカレッジ・フレンドや、地域の公民館等での外国籍児童・市民の日本語、教科支援を行うコミュニティ・フレンドの単位化を実現しました。これによって、より学びを深め、地域に貢献する体制を整えることができました。

第 5 の目標である学生たちの進路支援については、卒業者に対する進路決定者の割合を上げることを目指してきました。進路決定率は、コロナ禍が始まった 2020 年度を除いて概ね卒業者数の 85% に近い割合になっており、さらに数値を伸ばしていけるよう、今後も支援を続けていきたいと考えています。

学生の多様な進路希望を後押しするキャリア形成支援プログラムとしては、「キャリアプランニング」という同窓会の寄附講座を開講しています。また、就職、編入学に関するキャリア講座や、教職員による個別指導なども多面的に実施しています。学生たちは、これらのプログラムに主体的に参加することにより、社会人基礎力を身につけ、編入学や就職のための実践的な知識を得ることができるようになっています。

毎年、短期大学部では、学生たちの TOEIC のスコア、教養力を測定する人間学の授業での小論文、ゼミナールでのゼミ論文、サービスマーケティング活動のポートフォリオ、キャリア講座参加者の進路決定率といった多様なデータの分析を行い、教学アセスメントを実施しています。この教学アセスメントに基づき、また、高等学校や秦野市からの外部評価も受けながら、教育課程や教育内容の改善を行ってきています。本学は、これらのアセスメントに基づいて 7 年ごとに『自己点検・評価報告書』を作成し、作成した『自己点検・評価報告書』を重要な資料として提出して、一般財団法人大学・短期大学基準協会の認証評価を受けていますが、2014 年、そして 2021 年には、「建学の精神と教育の効果」「教育課程と学生支援」「教育資源と財的資源」「リーダーシップとガバナンス」において「適格」とであると認定されました。

短期大学部では、本学の教育プログラムで学んだ学生たちが「卒業認定・学位授与の方針」が示す能力をどの程度修得したか、そして、それに関連した学修成果の到達度はどのくらいであるかを調べるために、毎年、全卒業生を対象に卒業時アンケートを実施しています。この卒業時アンケートに見られる学生たちの評価は高く、2023 年 3 月のアンケート結果では、キリスト教ヒューマニズムについての理解力、教養力、英語力、専門力、多文化共生力という 5 つの能力について 9 割以上の学生が「身につけたと思う」との回答をしていました。

2020 年にコロナ禍が始まると、短期大学部の授業は Web 会議システムの Zoom を利用したオンライン授業となりました。2020 年の春学期の授業開始は 5 月にずれ込みましたが、これは、オンライン授業を実施するための準備の時間が必要だったためです。このとき、多くの資金を投入して学生たちの Wifi 環境整備のための支援をおこないましたが、その際には多くの寄付金が重要な役割を果たしました。この場を借りて寄付者の方々に御礼申し上げます。

ます。

その後、コロナ禍の状況を見ながら徐々に授業を対面授業に戻していきましたが、本人や家族が基礎疾患をもっていたり、高齢者と同居していたりする学生については、その事情に配慮して、対面授業にオンラインで参加することを認め、ハイフレックス授業を実施してきました。その他、教室へ換気扇を設置し、教室の収容定員を減らし、スクールバスの乗車定員を減らすなど、様々な感染対策を行ったことにより、コロナ禍であっても学生の学びを止めず、教育の質保証を維持することができたと考えています。

この10年間は学位授与の方針に掲げる学生の学修成果を重視し、教員が何を教えるかよりも、学生が何を学ぶかに焦点をあてて、学修者本位の学びを心がけてきました。学生による授業評価アンケートの結果や、TOEICのスコアやGPA等の各種データを分析した教学アセスメントを行い、計画・実行・評価・改善のPDCAサイクルを回しながら、教育の質保証を図ってきました。こうした全学をあげての点検と評価・改善活動によって教育プログラムを確立することができましたので、閉校の時まで質の高い教育を行っていききたいと考えています

2023年度からは新たな中・長期計画「グランド・レイアウト3.0」が始まりました。2024年4月の新入生が最後の入学者となりますが、新しい「グランド・レイアウト3.0」のもとで、今後も改革を進めていく所存です。2023年度には、これまで秦野市の小学校の教室で本学の学生が行っていたサービ斯拉ーニングとしての児童英語教育活動を、「ソフィア・イングリッシュ・デイ・キャンプ」という新たな試みに変更しました。これは、秦野市及び市教育委員会の協力を得て、小学校の児童たちに市が準備した貸切バスで秦野キャンパスに来てもらい、短期大学部の施設を活用しながら英語教育活動を行うというものです。

短期大学部は、「グランド・レイアウト3.0」では、(1) 地域社会の課題解決を目指す教育研究活動を実践する、(2) 学生の進路選択を可能とする教育プログラムを充実する、(3) キャンパスの利活用推進のため、施設貸出など事業外収益を強化し、安定的な学校運営のための環境を整備する、という3つの目標をたてており、これらの目標達成のために努力していきます。2025年度以降、学生募集停止となり、学生数はさらに減少しますが、これまでと同様、教育の質を保証し、学生への支援を続けていくつもりです。

(本稿は2023年12月2日に行われた創立50周年記念式典での学長式辞に加筆したものです。)